

日本民家園だより

特集 古民家の保存修理

vol.61



[山田家・野原家]

旧山田家住宅は富山県五箇山の庄川本流最奥、岐阜県にほど近い辺境の地、「桂」にありました。桂はダム建設により昭和45年に解体しました。桂には5軒合掌造がありました。移築された山田家1軒だけが現存しています。白川に近いので通常五箇山の合掌造にはない「下」の小屋「しゃし」があるなど、合掌造を考える上で重要な位置をしめる遺構といえます。昭和43年に現地解体・調査し、部材を民家園に運び格納し、昭和59～60年度に復原・組立工事を実施しました。その後、平成5年度・平成8年度に差し茅等の補修をしたものの今回が初めての葺き替えとなります。建物の規模は建坪が43坪と大型の民家で、建築年代は17世紀末から18世紀初期とされる年代の古い合掌造として重要です。平成9年に神奈川県指定重要文化財となりました。

今回の工事は川崎市の自費工事で清宮建築が施工しました。山田家背面全部144㎡を葺き替え、棟を作り替えました。野原家背面の一部と両側面底部分約84㎡を差し茅補修しました。工事費は約1,800万円。茅は5尺締め(周囲1.5m)で約1,050束、4トン積みトラック6台分のボリュームです。富士山麓の御殿場からとりよせました。屋根葺き職人は山田家のあった五箇山から10人を招き、ネソ(詳細後述)500本、藁縄(機械縄)径8～14mm60束、葎簀70㎡分、マニラロープ、針金、番線、丸太等の材料を用意しました。

茅葺きはかつては日本のほぼ全域で見られました。寄棟造、入母屋造が多く合掌造のような切妻は珍しいのです。近畿地方には入母屋が多く、ほかでは寄棟が多いです。材料、工法ともに地方色が豊富です。茅は主に「ススキ」を用いますが、アシ(ヨシ)、オギ、カリヤス等のイネ科の多年草を使う地方もあります。稲藁や麦藁も補助的に使います。竹と稲藁縄をよく使いますが、竹や稲の取れない山間部や東北地方では雑木を使います。棟・軒先は装飾の見せどころで、栃木・茨城の縞模様の軒先は見事です。

また、棟の納めかたはいろいろな種類があって興味深いものがあります。屋根面の形状にも五箇山の段葺きや杉皮を横縞状に入れる奥多摩地方の虎葺きなどがあります。

五箇山の茅葺きの特徴は屋根面の勾配がきついことです。通常は45度に対し約60度あります。切妻造で段葺きにします。棟形状が特異で、茅を積み上げた上に栗割材の「ノノセ」(次頁右下写真)と呼ばれる棟木を乗せ、平葺きの棟近くに梁行に差した栗材の水梁を縛り付けます。垂木は五葉松の

丸太を使い、柱を取った先の細い部分の残材を利用します。屋中は栗の割材を用います。地震や雪に対する強度を増すために屋根面に栗材の筋違が入り、これを「ハネガイ」、「コハガイ」と言います。軒先に麻の茎の皮を剥いたもの「オガラ」(麻殻)を用います。「オガラ」はお盆の迎え火に使うものと同じです。茅の量を節約し、色が白く見た目がきれいで、長期間使用できるという利点があります。戦後までは普通に取れましたが、今は副産物として麻葉ができるので厳しく栽培が規制され容易には取れません。今回の工事でも今まで使っていたものを丁寧に解体し再利用しました。

また、合掌造の特徴の一つですが、竹や藁縄の代わりにまんさくという木(10年生)の幹を使います。稲藁の代用としてねじって繊維状にして使い、これを「ネソ」といいます。また竹の代用は「ヌイボク」といって茅を押さえる横棧にまんさくの幹を使います。関東などでは竹を用い「押鉾竹」といいます。茅の葺き厚は約60cmと厚いです。水梁は栗の割材で山田家は1箇所1本ですが2本にするものもあります。この水梁と棟上の「ノノセ」を「タガ」で縛り付けます。「タガ」は古くは「カンコ」という枝の1端がY字状のもの、ふじづる、葡萄づるやネソを用いました。今はマニラロープや鉄の番線を使います。五箇山では雪が多いため棟は一冬毎に補修し、そのため棟積みは年々高くなります。棟上の杉皮は本来ありません。民家園では毎年補修出来ないで杉皮を敷いているのです。棟の端部に茅を束ねた「スズメオドリ」をのせます。その下の押みに「ケショウカヤ」という飾りを付けます。「ノノセ」と最上の母屋・棟木を「クツワネソ」で縛り付けます。「スズメオドリ」は「クツワネソ」を雨から守る役目があります。

五箇山と白川の合掌造りの違いは、葺く時に五箇山では妻を先に付け丸みをおびますが、白川では妻面の切り口と平葺きの境目が角になります。五箇山では段葺きにします。(ところが野原家があった利賀谷は五箇山ですが、段葺きにしません。利賀谷は昔は白川とのつながりが深かったからだといえます。)五箇山では「ノノセ」が3本、白川では2本です。白川は1回に片面1面を葺くのに対し五箇山では家の大きさや茅の取れ具合で、3分の1乃至5分の1面を葺くので、屋根面に縦の縞模様ができます。現在、合掌造で現地に残っているのは五箇山では便所などの付属屋を含んで約72棟、白川では100棟を超えます。民家園に移築された合掌造4棟は、それぞれ白川系・五箇山系の特色をよくあらわしたものであり、三溪園にある矢筈原家住宅(合

掌造)と共に、合掌造を知る上で、欠かせない文化財建造物です。

[太田家]

太田家は名主の家柄と伝えるほか詳かではありません。仏壇におさめられる位牌に万治、寛文、貞享、元禄の年号があり、その頃からこの地に住んでいたようです。

この住宅は茨城県北部にみられる別棟形式で、主屋と土間が棟方向を異にし、それぞれ寄棟造で茅葺になり、間に樋を設けています。主屋は様式手法から17世紀後半の建立と考えられます。土間は18世紀中頃の建立と思われます。

この住宅は主屋と土間の建立年代に差が認められますが、当初から別棟形式であったと思われるもので、茨城県に残るこの種住宅の古い遺例として重要なものです。

昭和45年に日本民家園に移築され、昭和57年に屋根葺き替え、平成4年に焼損にともなう復旧修理工事、平成13年に土間屋根谷部の補修工事(自費)を行ない現在に至っています。

今回の工事では屋根平葺き全体を差し茅補修し、棟を作り替え、煙出しの杉皮葺きを葺き直しました。東生建設が施工し、国庫補助事業として実施、工事費は1,500万円、茨城県から茅葺き職人を招きました。茅はこちらも御殿場からです。差し茅補修は古い茅の腐った部分を取り除き30cmほどに切った茅を差ししていきます。全体に差したら上からはさみで刈りながら降りてきます。仕上がった所は全体が新しい茅になったように見えますが、内部は古い茅が残っています。葺き替えよりは簡単な補修方法です。棟は割った竹を簀の子状に編んだもので覆います。茨城では「ヤロウグシ」というそうです。

[三澤家]

旧三澤家住宅は、長野県伊那市西町(旧伊那部宿)にあった町家です。三澤家は元禄三年より伊那部宿の名主問屋を勤めてきたと言われる家柄で、明治中期には薬の特許販売を行い村長を勤めたこともありました。西町は、伊那部宿の中心部分であって付近には大きな家が多く、三澤家も主屋が間口が7.5間、奥行8間でかなり大規模です。

この家は天保の大火後に建てられたと伝えられます。西町付近の他の遺構をみると細部の形式や仕事がよく似ていることから、この言い伝えは信頼してよいと思われます。

三澤家住宅は幕末の整備された代表的な町家建

築で、しかも家の質が非常に上等で、貴重な存在であるとして神奈川県指定重要文化財に指定されています。

昭和47年に日本民家園への移築され、その後、昭和55年度に屋根葺き替え・部分修理、昭和59年度に漆喰壁の外面塗り替え、昭和61年度に正面屋根葺き替え・部分修理(雨樋新設等)、平成元年度に緊急修理として正面屋根板表替え・床修理、一部取替えを行い、平成4年度に屋根葺き替え(一部屋根板再用)・部分修理を行いました。

平成13年度から少しずつ屋根板葺きの葺き替えを実施してきました。今年度でやっと完了しました。今年度は県補助事業として実施、東生建設が施工し、約600万円かかりました。屋根の葺き板作製は岐阜の中田社寺が担当しました。全屋根面積242㎡中23㎡を葺き替えました。民家園に移築後さわら板で葺かれていましたが今回の葺き替えで本来の栗板にもどしました。一部さわらのまま残っている箇所もありますが、この次の葺き替えで栗に戻りたいと思います。また、軒先の風返し板・妻の破風板も新しい栗材に交換しました。

葺き板は栗赤身手割り板、長さ60cm、厚さ9mm、巾15cm内外、葺き足が9cmです。葺き足というのは板とそのすぐ上に重なる板とのずれの寸法です。長さ60cmを葺き足9cmで割ると約7枚重なっていることがわかります。一枚の値段は約1,160円、屋根全体にすると18,000枚必要で2,080万円にもなります。栗の木はさわらなどの針葉樹と違い素性がよい木が少なく硬いので割手間が大変かかります。板はこのぎりを使わずに割って作ります。これは葺いた時に板と板の間に隙間があき、雨水が乾きやすく、また、表面の細胞が傷つかず水が板にしみこまないで板が長持ちします。屋根勾配がゆるいので毛細管現象で水が奥にしみこむのを防止する役目もあります。巾も揃っていません。葺くときに隣の板の境目が重ならないように組み合わせで並べていきます。板は釘などで止めず、置くだけです。9cmずつずらして置き、棧を並べ石で重しをします。昔は釘は高価でした。板は60cmの内9cmだけが風雨に晒されるので裏と表、手前と奥を入れ替えると4回使えます。その際に釘が打つてると作業に手間取ります。非常に単純な構造ですが先人の知恵を感じられるすばらしい工法です。

(建築職 外山明彦)

背景写真：葺き替えの完成した山田家

古民家の保存修理



三澤家

- ① 背面底詳細。石にはってあるシールは解体番付。工事中一旦外すので元の場所に戻せるように番号を付ける
- ② 三澤家 竣工 背側面。色のうすい部分が今年度葺き替えた所

- ① 太田家 主屋 棟 竣工の状態
- ② 太田家 主屋 刈り込み中
- ③ 太田家 竣工 正側面



太田家



山田家



- ① 山田家 住宅 屋根葺き替え完了 軒足代解体前の状態
- ② 山田家 屋根葺き替え風景
- ③ 山田家 棟端部詳細